

2021年3月14日

## 永遠の命を受けて生きる

ヨハネ3:16~21

### ・逝去会員記念礼拝を覚えて

高知教会では、3月第2週の礼拝を逝去会員記念礼拝として行っています。今日、2021年度の逝去会員記念礼拝を行いたいと思います。高知教会に連なって生涯を歩まれ、そして、地上の生涯を終え、神様の御許に帰られた信仰の先達をお覚えして、この礼拝を捧げています。また、例年と同じように、逝去会員の名簿をお渡ししています。そして、週報に記載していますように、今年度も新たに10名の方々の名前を加えることになりました。特に、この1年の間に、長く高知教会の教会員として歩まれた方をお送りすることとなったように思います。長い期間、共に信仰の旅路を歩ませていただいた方々を神様の御許にお送りをする。そのことは、大変寂しいことでもあると思います。そういう思いを抱えながら、私たちはこの礼拝を献げています。

そして、例年はこの逝去会員記念礼拝を覚えて、特別に聖書の箇所を定めています。けれども、今回はいつも礼拝で読んでおりますヨハネによる福音書の続きを、そのまま読もうと思いました。特に、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」、この言葉を共に受け止めたいと思いました。それは、この逝去者名簿に名前を記しております少なくない方々が、この「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」というイエス様の言葉を、愛する聖書の言葉として挙げておられたからです。私は、原則として葬儀においてはその方の愛唱聖句を通して説教をすることにしてはいますが、このイエス様の言葉を読んで葬儀の説教したことが何度かあります。そういう意味で、ヨハネによる福音書を読み進めてきて、たまたま今日この箇所に行き当たったのですが、そこに、神様の大きな導きがあるのではないかと考えています。

なぜ、少なくない方が、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」、このイエス様の言葉を愛唱聖句として挙げられているのでしょうか。それは、この言葉に、私たちが与えられている神様の恵みが、簡潔に表されているからだだと思います。全くの余分なく、十分に言い表されている。このイエス様の言葉は、聖書全体が私たちに伝えていることを一言で言い表すならばこの言葉になるという意味で、「小聖書」と呼ばれてきました。福音の凝縮と言ってもよいかもかもしれません。そして、多くの高知教会の信仰の先達の信仰の生涯を支えることになったこのイエス様の言葉に共に聞き、私たちに与えられている、驚くような恵みを改めて受け止めることを通して、今年度の逝去会員記念礼拝を行いたいと思います。

### ・神様の愛

先週、この前の箇所を共に読みました。ユダヤの指導者であるニコデモが、神様に救われるということが分からなかった、それで夜、密かにイエス様の所を訪ねるのです。そのニコデモの思いを知っていたイエス様は、すぐさま「新たに生まれなければ、神の救いに与ることはできない」と言われたのです。そして、戸惑うニコデモに「霊と水から生まれる」と言い、更に、そうして神の霊によって、新たに生まれさせられる者が自由に起こされていくことを語られました。そのような対話を通して、イエス様がニコデモに伝えようとしたのは、神様の救いに与ることになる「新たに生まれた」者とは、人間の意志や努力によって実現するものではないということです。つまり、救いは人間の側の状態によって得られたり、得られなかったりするものではないということです。そのことを、イエス様は戸惑っているニコデモに真直ぐにお伝えになられたのです。

だからこそ、その後イエス様は、ニコデモに、神様は私たち人間に対してどのような思いを

持っておられるのか、そのことをお伝えになるのです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」、これこそが、神様の御心であるのです。そして、このイエス様の言葉に示されている神様の御心を受け入れることこそ、信仰であると言ってよいと思います。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」、これは長く信仰の生活を歩んでいる者にとっては、何度も耳にしてきた言葉であると思います。確かにその通り、この恵みに生きています。しかし、今回改めて説教のためにこの言葉を何度も何度も読んでいく時に、自分自身本当にこの言葉を分かっていたのだろうか、分かったと思い込んで、この言葉を受け止めていなかったか、そういう思いになりました。ある牧師が、この言葉をキリスト教に出会ったばかりの人向けの「初心者用の言葉」と受け止めていないかと、強く問うていました。勿論、私たちはこの言葉を「初心者用」とは思っていないと思います。しかし、この言葉は簡潔であるが故に、何か分かり切った言葉と受け取っていないかとは思われました。改めて、このイエス様の言葉が持っている意味はどういうことなのか、深く聞かなければならないと思います。

まず「神は...世を愛された」のです。「世」とは、私たちが生きる世界ということです。しかし、このヨハネによる福音書では特別の意味を持つ言葉で、神様から離れてしまっている世界という意味合いが込められています。敢えて言えば、様々な問題が渦巻いているようなその「世界」です。そして、そのような世界に生きている一人一人の人間をも含んでいます。つまり、「世を愛された」とは、様々な課題が渦巻いているようなこの世界を、「そんなことでは駄目だ」と言われるのではなく、それでも「愛される」のです。それが、神様の意思なのです。つまり、私たち人間と神様の関係は「愛し愛される」関係であるということです。更に、その愛は形となって実際に表されたのです。「その独り子をお与えになったほどに」、これが神様の愛の具体的な姿です。勿論言うまでもなく、クリスマスの出来事なのです。最も大切な独り子であるイエス様を、私たち人間の世界にお送りくださる。それまでに深い愛なのです。

#### ・滅びに至る人間

そして、それは「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」と。この言葉を受け止める時に、とても深く考えさせられたのです。それは、私たち人間は、神様との関係に生きなければ滅んでしまう存在であるということです。そう言えば、神様を知らなくても生きる人は多くいるのではないかと思われるかもしれません。特に、私たちが生きる日本社会において、99%の人たちは神様を知らずに生きているわけですから、神様を知らなくても何の支障もなく人生を歩むことが出来るようにも思えます。そうすると、せいぜい、よりよく生きるために信仰を持っているとよいのではないかとか、聖書の示す神様の愛に立った方が少しは良い人間として生きることが出来るのではないかとか、そういうことに過ぎないということになってしまうかもしれません。しかし、ここでイエス様が「滅びないで」、つまり、神様との関わりを持たずに生きるならば、それは滅びに至る道であるということです。それは、どうということなのでしょう。

先週、教会学校の礼拝で、ペトロがイエス様を「救い主」と告白する箇所を子どもたちと共に読みました。その時に「救い主」ですから、当然「私たちを救ってくださる」方。救ってくださる方ならば、私たちはどこから救われるのかということで、「罪からの救い」について受け止めました。この「罪」を受け止めるために、新約聖書の一人の人物のお話をしました。それは「ザアカイ」です。私は、以前ザアカイの姿を知ったことで、本当に人間が滅びに向かって進んでいるとはどういうことか、初めて分かったような思いがしました。

ご承知のように、彼は、徴税人でした。頭であり、金持ちだったのです。地位も財産も持っている。その意味で、ザアカイは成功者だったのです。私たちを含め、多くの人がそういう人生を歩むことが出来たらどんなに幸せか、そう思っている人生を歩んでいたのです。しかし、

その彼がイエス様を見たいと思ったのです。しかも、木に登ってまで見たい、と。彼は外側から見れば成功者となっていました。結局心に空洞を抱えたままだったのです。多くの人から徴税人をしているけしからんやつと言われていましたし、自分でも所詮自分は神様から遠く離れていると思っていたのです。そのザアカイの許をイエス様は訪ねられ、「今日救いがこの家を訪れた」とまで言われました。そして、イエス様はこう言われます。「人の子は、失われたものを捜し出して救うために来たのである。」と。つまり、ザアカイは「失われたもの」だったのです。

「失われたもの」、それが、私たち人間が滅びに向かっている存在ということ。聖書の言葉で、この「失われたもの」とは、本来あるべき場所にいないということの意味です。羊が羊飼いの許という本来生きる場所を離れてしまっている、それは、そのまま生命の危機を意味していました。そういう姿で、実は私たち人間は生きているということなのです。このザアカイのような姿で、実は私たち人間は歩んでいるということです。こんな人生を歩むことが出来たらどんなに良いかと思うような人生を歩んでいる人が、空虚を抱えながら歩んでいるということをよく聞きます。そういう姿なのです。そこに「失われたもの」の姿があります。

#### ・救いに生きる

しかし、神様は人間がそうして滅びに向かうことを良しとされないのです。救おうと願われ、そして、実際にそのための行動をされるのです。それは、イエス様を私たち人間の世界にお送りになることです。そして、永遠の命を与える。先ほど、人間は失われたものとなっている、つまり、あるべき場所にいないことを意味していました。つまり、救いとはあるべき場所へと取り戻されること、そして、あるべき場所へと取り戻された姿を「永遠の命」とイエス様は言われるのです。「永遠の命」とは、不老不死のようなものではありません。ある牧師は、恵み深い神の御懐に抱かれて生きる姿であると言いましたが、私もその通りだと思います。自分の命が、神様に深く繋がった命であることを知ることで。神様との絆は、永遠に切れることがない、そのことを知って生きる、それこそが永遠の命を生きることです。それが「世が救われる」、つまり、世に生きる私たち一人一人が救われる姿なのです。

そして、この後イエス様は「御子を信じる者は裁かれぬ。信じない者は既に裁かれている。」と言われます。敢えて言えば、イエス様を信じない者は裁かれると、イエス様は言われるのです。この裁かれるという言葉から、イエス様を信じないと最後の審判の時に結局良しとしていただけないというようなことを考えられるかもしれませんが、しかし、イエス様が言われることは、全く違っているのです。「信じない者は既に裁かれている」、「既に」と言われるのです。もう既に裁かれている。それはどういうことでしょうか。その裁かれている姿を、イエス様は「光に来ていない」と言っています。つまり、裁かれた結果は何か、イエス様を受け入れていないということなのです。イエス様を頼っていないということ。イエス様を受け入れていない、頼らないということは、結局イエス様を通して示される神様の愛を知らずに生きていることとなります。つまり、失われた者として生きるしかないということ。その時、人生は自分一人で懸命に歯を食いしばって生きていく以外なくなるのです。

多くの日本に生きる人たちは、自分の道は自分の道で切り開く、誰かに頼る人生ではなく自分の努力で自分の人生を良いものとしていく、そういうことで歩んでいると思います。勿論、自分の人生を大切に、精一杯生きることは大切なことです。しかし、それが全てということでは歩めなくなることがあるのです。自分の人生という船が、思いもしない大きな嵐に巻き込まれることがある。愛する者との別れや自分がこれを人生の意味と思っていた物を失ってしまうこともある。また、自分の健康の問題に行き当たってしまうこと、などです。そして、今、更に大きな波に直面しています。新型コロナウイルスに向き合って歩まなければならない。そういう想像もしなかった現実の中に立たされているのです。これは、自分の力だけではどうすることもできないような、思いもしない現実であると思います。そのようなことを通して、力を持っていると思っていた自分が、弱く小さな存在であることを受け入れざるを得なくなるので

す。

一方で、私たちは、救いに与って生きています。永遠の命を与えられて生きています。救いに与っている、それは、自分にとって不都合なことが起こらなくなるということなのでしょう。そうではありません。私たちも日本に生きる多くの人たちと同じように、思いもしない現実の中に立たされて歩んでいくのです。私たちの人生という小舟もまた、嵐に会うのです。その嵐から逃れることはできないのです。イエス様を信じている私たちであっても、新型コロナウイルスの問題に直面しているようにです。それは、イエス様を知らない多くの人たちと何ら変わりはないのです。しかし、たった一つだけ違っていることがあります。それは、そのような現実の中を歩む私たちを、どんな時にも支えようと願ってくださっている方がおられることを知らされているということです。神様であり、イエス様です。このイエス様が、世の終わりまでいつもあなたがたと共にいると約束してくださっているのです。そのことを知って生きることが出来ることこそ、イエス様を信じる、つまり、イエス様に頼る者が与えられている特権なのです。その恵みに私たちは生かされているのです。

#### ・逝去会員の姿を思って

今年も、この逝去者の名簿に新たに10名の方の名前を加えることになりました。この2月にもAさんが逝去され、ここに名前を記すことになりました。私は葬儀のために、教会員調査票を確認します。その方が愛唱聖句や愛唱讃美歌を記しておられるからです。Aさんの教会員調査票を確認していて、とても心に残ったことがありました。それは、7~8枚確認しましたが、いずれも愛唱聖句が同じだったことです。詩編32編です。その聖書箇所をずっと愛唱聖句として書かれていた、それほど思いがあった聖書の言葉であると思います。この詩編は罪の赦しへの感謝の歌です。その箇所を愛唱聖句として挙げられていたAさんは、この詩人と同じように、罪赦されていることを受け止めつつ歩まれたことを思います。Aさんは、「神がおられるならばどうして」という問いを抱えて歩まれました。しかし、それを神様に問いながら歩んだ。問い、応えられ、赦され、また問い、応えられ、赦される。そういう関係の中を歩まれたことを思います。それは、本当に深い神様との絆であったことを思います。深い意味で、厳しい現実の中を神様の支えを受けて歩まれたのです。永遠の命を受けた者として生涯を歩まれたことを、受け止めさせられました。

そして、それは9月に召されたBさんも、11月に召されたCさんもそうでした。それぞれ愛された聖書の言葉は、罪赦されて神の子とされている恵みを伝える言葉でした。

今は、数名の方の姿について触れましたが、それだけではありません。今日、この礼拝でお覚えしている逝去会員のお一人お一人は、誰一人例外なく、永遠の命を神様から与えられて生きられました。永遠に切れることがない神様との深い交わりの中に置かれ、人生を歩まれました。その実際の姿がここに示されているのです。そして、私たちも信仰の先達の後を歩んでいくのです。これからも、様々な困難に向き合いながら、地上の生涯を歩んでいくのです。そうして歩む私たちの真の力は、私たちの中にある何かではありません。私たちを愛し、生涯変わらず支えようと願ってくださっている神様の御心にこそあります。そして、神の愛の形として世にお生まれになったイエス様にこそあります。このイエス様を信じる、つまり、頼っていることこそ、私たちが永遠の命を与えられて生きていく具体的な姿です。そうして、永遠の命を与えられた者として、信仰の生涯を歩ませていただくのです。